

高橋秀哉作 「**出会い**」

効果音 (工場の音)

高橋秀哉 おい伊藤、今何時だ？

伊藤清 作業中に話しかけないでくれよ。一つ誤れば製品がペアだよ。

高橋 はいはい、分かりましたよ。だけどお前は仕事熱心だなあ。

効果音 (作業終了のチャイム)

高橋 やっと午前中の作業終了か。おい伊藤、メンだメシ。

ナレーション 伊藤君と高橋君は、去年の暮れ、この会社に同期で入社し、同じ部署に配属されました。出身校は違いますが、新人はこの2人だけのためか、互いに良き話し相手になっています。

高橋 あ～あ、この昼休みが終わると、また単純作業の連続か。一体いつになったら設計に回してくれるのかな。

伊藤 そうか、君は設計希望か。でも入社して1年間は自分の希望に関係なく、製造ラインに配属なんだぜ。

高橋 そうは言うけど、もう3月だぜ。そろそろそれなりの発表があってもよさそうだけど…。伊藤、お前、気にならないのか？

伊藤 そりゃ僕も君と同じ設計希望だから、気にならないことはないさ。だけど、今はこの製造ラインで一生懸命やるのが義務だと思うよ。

高橋 なるほど、義務ねえ。

伊藤 おかしいかい？

高橋 イヤ、お前の考えは間違っちゃいないよ。ただそういうように考えられる伊藤がうらやましいというか、おめでたいというか…。

伊藤 どういう意味なんだ、高橋？

高橋 さあ55分だ。そろそろ自分のラインに行かないと、主任がうるさいからな。それじゃお先に。

ナレーション 高橋君は、設計にかけてはなかなかの腕をもっていました。高校時代から、専門科目の中でも設計はずば抜けていたのです。しかしこの会社に入った当初から、彼の仕事ぶりはあまりよくありませんでした。ふてくされたようなところがあり、しかも彼には、たった2人の動機である伊藤君さえ入り込めない孤独の影が、いつも付きまとっていました。

効果音 (休憩のチャイム)

高橋 (ため息) 15分の休みか。用足して一服するか。

同僚A 高橋君。

高橋 はい。

同僚A 検査室で主任が呼んでるよ。

高橋 分かりました。どうも。(モノローグ) 検査室で主任が呼んでるって、なんだろう？ おっ、ひょっとしておれを設計に回してくれるのかな？

効果音 (ドアをノックする音)

主任 ちょっとここに座んなさい。(間) 君は一体学校で何を学んできた？

高橋 はあ？

主任 「はあ」じゃない。「何を学んできたか」と聞いてるんだ。

高橋 わたしは3年間、電気をやってきましたけど、何か？

主任 この製品を見たまえ。

高橋 これは僕の担当の…。

主任 そうだ。わたしのラインで君が担当しているものだ。今日でもう3台目じゃないか。君は図面も満足に理解できないのか。いつかこの間違いに気づくと思っていたが。

高橋 いいえ、間違いではありません。わたしのやりやすいように、配線を少し変えただけです。

主任 それが間違いだと言ってるんだよ。この図面は設計の段階で十分に検討したうえで書かれたものなんだ。作業員全部が君のように自分勝手な仕事をしたら、どうなると思うんだね？製品に対する信頼性がなくなってしまうじゃないか。

高橋 分かりました。今後気をつけます。

効果音 (ドアを閉める音)

ナレーション 自分の希望がかなえられるかという期待で主任のところへ行った高橋君にとって、それは大きなショックでした。

伊藤 おい、高橋、高橋。聞こえないのか、おい?!

高橋 え？

伊藤 おい、どうしたんだ、ポケットとして？ 検査室で何してたんだ？

高橋 主任から、「君は図面も満足に理解できないのか」って褒められたよ。(モノローグ)チキショー。図面どおりやってほしいなら、最初っからそう言えばいいんだよ。回りくどい言い方しやがって。胸くそワル！

ナレーション 高橋君は、ムシャクシャした思いで午後の半日を過ごしました。その日の夕方――。

効果音 (終業のチャイム)

高橋 あ～あ、やっと終わったよ。なげえ一日だ。

伊藤 よう高橋、どっかに今晚メシ食べに行かないか？ おごるからさ。

高橋 ほー、珍しいこともあるねえ。伊藤が誘ってくれるとはまあ。せっかくのご招待を断っちゃ失礼に当たるから、行きますか。

効果音 (レストラン。BGMと食器の音)

高橋 いやあ食った食った。久しぶりだぜ、こんなうまいもの。だけどいいのか？ ここ案外高そうだぜ。

伊藤 ところでな、高橋。

高橋 ははん、やっぱりそうか。

伊藤 「やっぱりそうか」って、何がだ？

高橋 お前が珍しく誘うから、何か言いたいことでもあるんじゃないかと思ってたんだよ。うっかり誘いに乗ると、あとが怖いぜ。

伊藤 まあそう言わずに聞けよ。君は今の会社になんで入社したんだ？

高橋 「なんで」って、ここしか残ってなかったからだよ。そういうお前はなんでだ？

伊藤 僕は自分で希望していた職場だからね。君が「ここしか残ってなかった」と言うのは、何か理由がありそうだね。だけど、それは言うなれば“好きじゃないけど、しょうがなく入った”ってことだろ？ そういう態度が同じラインにいる先輩の石田さんなんか、すごく嫌がってるみたいだよ。実際、口には出さなくても、態度に表れている。そうなれば君自身にもいいことがある

とは思えないが。

- 高橋 これはどうも忠告をありがとう。だが、お前なんかはこのおれの気持ちが分かってたまるか。どんな思いでおれがこの会社に入社したと思ってるんだ。今のような単純作業ばかりもう1年間。早く自分の能力が発揮できる設計に回りたいと思うのが普通じゃないのか、伊藤？
- 伊藤 確かに、君の技術は先輩にも引けをとらんだろ。しかしその君にチャンスがなかったというのは、どういう訳なんだ？ よかったら聞かしてくれないか？
- ナレーション 高橋君は、真剣そうな伊藤君の顔に、今までだれにも言わなかったことを話してみる気になりました。
- 高橋 実は高校の時、イヤなことがあったんだ。おれが高3の9月ごろだった――。
- 音楽 (ブリッジ 回想)
- 高橋 そのころ、中学からの友達で、橋本というのがいたんだ。そいつと、夏休み1か月ちょっと、就職試験のため一緒に勉強してきたんだ。
- 橋本 おい高橋、先生が呼んでるぞ。
- 高橋(モノローグ) なんだかドキドキするな。なんたって今日は校内選考の発表だからな。
- 効果音 (ドアを開ける音)
- 高橋 失礼します。
- 先生 (言いにくそうに)高橋、実は君の就職先の希望を変えてもらいたいんだが。
- 高橋 先生、それはどういうことですか？
- 先生 橋本も君と同じところを希望しているんだ。
- 高橋(モノローグ) え、根元が?!
- 先生 あそこからは求人は1人だけだから、選考委員会でもめてね。わたしは何しろあそこからの求人は初めてで、今後のこともあるからという大多数の先生方の意見で、橋本に決定してしまったんだ。
- 高橋 しかし先生、橋本だったらほかにもコネだってあるし、何も僕の希望してるところに来なくなつて…。先生、僕の希望はここだけなんですよ。
- 先生 分かってる。しかしあそこは前々から彼のお父さんにも頼まれてるし、学校としては…。
- 高橋 (さえぎって)分かりました。失礼します。(急いで教員室を出る。)
- 高橋(モノローグ) (エコー)橋本のやつ、今まで友達だと思ってきたのに、人の足元見やがって。よりによってなんでおれのところに来たんだ？ 夏休みの間、自分の希望は一言も言わないで、心の中じゃ出し抜こうとしてやがった。なぜだ？ なぜなんだ?!
- 効果音 (回想終わり。レストランの中。)
- 伊藤 …そうか、そんなことがあったのか。
- ナレーション 伊藤君は、初めて高橋君の心の傷に触れて、その夜、心を込めて友のために祈りました。彼はクリスチャンだったのです。その翌日――。
- 伊藤 (心配そうに)主任、ラインに高橋君が見えませんが、どうしたんですか？
- 主任 「体調を崩して今日は休む」と朝電話があったよ。まったく体調を崩すなんてたるんだ証拠だよ。君からも言っといてくれないか。
- 伊藤 はあ。
- ナレーション その日、高橋君は会社に「休む」と電話を入れたあと、レンタカーを借りると、ぶらりと海へ行って、一日を過ごしたのです。

高橋(モノローグ) あれ、気がついたら、よりによって工場のほうへ来ちまったよ。我ながらやっぱり気になんのかな。(ハツとして)あれ、まだ明かりがついてるぞ。

ナレーション 不審に思った彼は、自分のラインへ急ぎました。ドアの隙間からなかをのぞくと――。

高橋(モノローグ) あれー、伊藤のやつ、おれのラインで何してんだろ。あ、あれはおれの担当している製品だ。伊藤、あいつ…。

効果音 (ドアの開く音)

伊藤 あ、高橋、どうしたんだ？ 体はいいのか？

高橋 伊藤、お前、どうしてそれを？ おれの遅れをカバーしようと思ったのか？ おれは、おれは今日、会社サボって海に行ってきたんだぜ。

伊藤 いいんだ、高橋。これも見つからなきゃ黙ってようと思ったんだけど。まあ僕にとって君は、君が考えている以上に大切な友達なんだ。特に昨日の話を聞いてからはな。さ、上がった。帰ろうか。

ナレーション 帰りの電車の中で、伊藤君は自分がどのようにしてキリストに出会ったか、そしてその時から、人生の出会いを自分なりにどんなに大切にしているかを話してくれました。

高橋(モノローグ) キリストとの出会い、友との出会いか…。

ナレーション 高橋君は、長い間冷え切っていた心が、初めて温かく燃えてくるのを感じていました――。

<完>